

長谷川正康著「噛む―歯は生命」

本書は、

「白玉の歯にしみとほる秋の夜の

酒はしずかに飲むべかりけれ

花秋の莖を噛み切る歯のさきのつめたさよ

朝のこのうつり香よ」

ご存じ若山牧水の歌です。牧水は歯を意識して詠んだのではないでしょう。しかし、自然を愛し、酒を愛し、旅を楽しんだ彼は、この歌のなかに己れの生命を歌い、そして、たくましくして歯が身体とともに生きていることを詠んでいるのです。

小林一茶は文化十年（五一歳）の正月を迎え、

「すりこ木のような歯莖も花の春

かくれ家や歯のない口で福は内

歯ぎしみの拍子ともなりきりぎりす」

の句を残しています。一茶は五十歳で上下とも歯が全く無くなったのです。そして、彼はこの年まで未婚で、五二歳のときようやく妻の菊を迎えました。

滝沢馬琴も『草木身體同訓考』に「歯は葉である。歯は蕃のように互いにより合っている。歯が脱落するのは秋に葉が落ちるのに似ている。ただ松柏のように霜に堪えて葉の落ちないものもある。人もこれに似ている。老年になっても歯が

しつかりしている人は長生きできる。それで歯を與波比という」

また中国の『禮記』には「歯は生命であり人が相集まって集団をつくるに似て、一本の歯が脱落しても、それは仲間を失って弱体になる。また、歯の抜けることは生命を縮めることである」

『論語』に「没齒」という言葉がありますが、これは、生命が終わる、寿命がつきるという意味なのです。

このように、歯と生命との関係を記した昔の書物は多く、いかに昔の人々が歯に関心をもっていたかがうかがえます。省みて、現代の人々は歯というものを、どのように考えているのでしょうか。

この「はじめ」で始まる、まさにまれにみる臨床歯科医にして史家、そして文化人としての著者に満腔の感謝を捧げるものである。本書の内容を目次よりみると、「歯は生命」「歯みがきの歴史」、「歯の病氣と予防法」に大別されている。さらに「歯の生命」の項には、歯とは、噛むということ、哺乳動物の歯の役割、噛むことの大切さ、噛むことによる脳への刺激、噛むことと消化、噛むこととストレス解消、よく噛むことは肥満の防止、噛み合せ、噛むことと人相、美人の条件からなり歯学を修めた文化人でなければ書けない最大の楽しみをあじわせてくれるところである。

次の「歯みがきの歴史」の項は、パピルスに登場した歯みがき剤、お釈迦さまと歯みがき、ヒポクラテスと歯みがき、

古代ローマ人の口腔衛生、ヨーロッパ中世の口腔衛生、含嗽、洗口剤とワイン、中世紀口腔衛生を支えた理髪外科医、近代歯科医学の確立、仏教思想と歯みがき、わが国古代からの歯みがき、江戸時代の歯みがき剤(粉)の商品化、自家製歯みがき剤、江戸の歯みがき粉と楊枝、明治時代以降の口腔衛生、今日の歯みがき剤、からなり歯科医学史家としての著者を知ることができる。

最終の「歯の病気と予防法」の項は、歯と食物、歯の構造、むし歯はなぜできる、歯周病、顎関節症、不正咬合、口臭、歯ぎしり、パラチノース、歯のみがき方、歯ブラシの選び方、歯間ブラシ、フロスシルク、電動歯ブラシ、老化・特に口腔の老化、インプラント義歯、レーザー照射による治療からなり臨床歯科医としての著者の診療姿勢がまぶたに浮かんでくる。

そして「あとがき」。噛むことは、なぜ大切なのかから始まり口腔の老化で食べれない、噛まない(噛めない)、動けない、楽しくないでボケてしまふ、健康は自分で作るものです。したがって、歯や口腔内の健康管理は自分でやらなくて、だれがやるのでしょうか。

私は、ホームドクターを決めて、年三回、四カ月に一度は診療室を訪れてくださることを願っていますと人間ドックと同じように口腔ドックの必要性を強調しています。本書と著者に乾杯!

毎週何百冊という本が発行され、発行部数が競われている。

しかし、僅か二〇〇ページ余りに過ぎない本書が何と重く感じられることであろうか。

(谷津 三雄)

〔求龍堂・東京都千代田区紀尾井町三―三文藝春秋ビル九階、電話〇三―三二五九―三三八一、一九九一年発行、B6判、

二二九頁、定価二二〇〇円〕

神農五千年刊行委員会編『神農 五千年』

『神農五千年』には、一つの伝説、二つの事実、三つの心が述べられている。

一つの伝説とは、神農の伝説である。二つの事実とは、まず神農から始まり太公望呂尚をへて、朝鮮半島に至った姜一族の歴史である。もう一つの事実とは、近代東アジアに起こった未曾有の歴史変動にもあそばされた人々の数奇な運命である。三つの心の第一は、この『神農五千年』の出版費用の全額を出資された姜云培氏の民族と氏族にたいする篤実なる心である。心の第二は、姜氏の求めに応じて、この書物に素晴らしい論文を寄せられた研究者たちのあつち思いである。

もう一つの心は、それはこれらの論文によって明らかにされた中国朝鮮韓国日本台湾などに、なお連綿と続く神農への信仰である。

伝説の神農は、楠山春樹「神農の神話伝説」、石川忠久「神農と文学」、劉起釗「中国における神農崇拜」に明らかである。